中世日本語における「これこれ」

指示表現としての解釈と感動詞化

深 津 周 太

1．はじめに

近世期以降、呼びかけの感動詞[1)]「コレ」及びその反復タイプ[2)]である「コレコレ」が多く見られるようになる[3)]。(1)に前期上方語、(2)に後期江戸語の例を示す。

(1) a．これ黙りや、かりそめながらやす大事何を見てさはいふぞ（近松・堀川波鼓）
　　b．是々、侍衆、先若殿の御機嫌をうかゞひ給へ（上方歌舞伎・けいせい浅間獄）
(2) a．コレ、あれが女郎か（噺本・無事志有意）
　　b．コレヘ、待んせ。乾魚なんぼするぞい（浮世風呂）

「コレ」は指示詞「これ」が感動詞へと変化したことで生じた「語彙的感動詞」[4)]であり、その変化の実態が注目されてきた[5)]。ところが、反復タイプ「コレコレ」の成立過程が顧みられることは、これまでほとんどなかったと言ってよい。これは、「コレコレ」が感動詞「コレ」の反復に過ぎないとみなされてきたことによるものと思われる。そのため、感動詞「コレコレ」に関してはその成立時期も明らかにはされておらず、従来の見解では中世末期に存する次のような「これこれ」も感動詞の一部として扱われる[6)]。

(3) a．是ヘ御らん候へ、此こがねを、おもての門くわいにてひろい申て候（説経節・まつら長じや）
　　b．このはに水をふくませて。御枕によりそひて。これヘ聞召れよと（説経節・ほうぞうびく）
　　c．数の形見をとりいたし。これヘ御覧候へとて（幸若舞・山中常盤）
(4) a．殿はらにたいめんし。是々御返事とて奉る（説経節・をくりの判官）

b．先こめぼねから御めにかけう、是々　（虎明本狂言・目近籠骨）

c．〔売手〕これへ　〔次郎冠者〕是がこめほねで御ざるか

（虎明本狂言・目近籠骨）

⑶は「これこれ」と命令形動詞が共起するタイプ、⑷は「これこれ」が単独で現れるタイプである。中世末期において「これこれ」という形態を有する表現は、「コレへノコト」（詩学大成抄）、「コレへカチカウタカ」（同）のような複合名詞「これこれ」を除けば[7]、すべてこの二つの類型に収まる。

たしかに⑶⑷のような「これこれ」を感動詞「コレコレ」とみなすことは文脈上問題ないように思われる。しかしその一方で、これらの例が指示詞「これ」の現場指示用法である可能性を否定できないことも事実である。⑶⑷の諸例はいずれも、話し手が具体的なモノ（「此こがね」、「数の形見」、「（このはにふくませた）水」、「御返事」、「こめほね」）を聞き手に「見せる」「提示する」という状況であり、コ系指示詞で指示される対象が現場に存在している。また、⑶のタイプの命令形動詞に注目すると、それらがすべて他動詞命令形であることに気付く。この事実は、当タイプに現れる「これこれ」が命令文の目的語に相当する要素である可能性を想起させる。

本稿の目的は、従来感動詞とみなされる中世末期の「これこれ」をタイプ別に精査し、それらがいずれも指示詞「これ」の用法として解釈しうることを主張することにある。その上で、感動詞「コレコレ」がこれらの「これこれ」を基盤として生じたものであるとの観点から、その成立プロセスの考察を行う。

まずは2節において、中世末期における「これこれ」の二類型を観察し、⑶のタイプは共起する命令形動詞との関係から、⑷のタイプは現場における指示対象の有無という観点からそれぞれ指示詞「これ」の用法として分析可能であることを述べる。続く3節では、近世初期の寛文年間頃まで中世末期の様相が継続しており、感動詞「コレコレ」の確例が現れるのはそれ以降であることを指摘する。さらに、2節・3節で確認された現象面の事実に基づき、4節では感動詞「コレコレ」の成立プロセスを検討する。

2．中世末期の「これこれ」

2.1　命令形動詞と共起する「これこれ」

まず、「これこれ」と命令形動詞が共起するタイプから話をはじめる。当タイプに見られる命令形動詞はいずれも他動詞である。ここには前出⑶を再掲するが、後掲する他の例にも同じことが言える。随時参照されたい。

(3)′ a．数の形見をとりいたし。これ〳〵御覧候へとて　（幸若舞・山中常盤）
b．このはに水をふくませて。御枕によりそひて。これ〳〵聞召れよと
（説経節・ほうぞうびく）
c．是〳〵御らん候へ、此こがねを、おもての門くわいにてひろい申て候
（説経節・まつら長じや）

このことから、(3)に見たタイプの「これこれ」が、他動詞命令形に目的語として要求された指示詞句（格助詞ヲは非表示）の反復、つまり［これφ＋命令形］の「これφ」を重ねたものであるとの仮説を立てうる[8]。本稿では当タイプを［これこれφ＋命令形］と呼ぶこととする。以下、この仮説の妥当性を検証するため、［これφ＋命令形］、［これこれφ＋命令形］両構文の命令形動詞に注目したい。

まずは指示詞句を反復しない［これφ＋命令形］について、拙稿（2010）で述べたことを確認しよう。周知のごとく、中世以前の日本語において格助詞ヲの非表示は「常態であるとさえいえる」（小田2006：114）ものであったが、中世末期以降はヲ表示を規範とする方向へと傾いていく。しかし、このような格表示の在り方の変化に逆らって、ヲ非表示の形で慣用化していく表現も一部に見受けられる。［これ＋命令形］という構文において、述部の命令形が「見る」及びその意味範疇の動詞である場合に限ってヲ非表示のパタンが慣用化するのがその一例である。以下、このパタンを［これφ＋見よ］と呼ぶ。

(5) a．これ見よ、この子が文の書きやうのはかないことよ　（天草版平家物語）
b．いかに長殿。是御らんせよ　（説経節・をくりの判官）
c．是みさしめ、もはや何もなひ、是がざしきじや　（虎明本狂言・鈍根草）

一方、それ以外の命令形動詞が述部に立つ場合のヲ非表示パタン（［これφ＋その他命令形］）はほとんど見られない。拙稿の調査の範囲では(6)の1例のみであり、こちらは明らかに規範意識の影響下にあると言えよう。

(6) （妻）これまいれ《おとこのむ又ちやをたてゝ、もちてゆく、いつれもかひでみて、むさいと云てのまぬ》　（虎明本狂言・今神名）

逆に、ヲ格を表示する［これを＋命令形］の内訳を見ると、［これを＋見よ］がほとんど見られず、［これを＋その他命令形］の用例が大半を占めている。各パタンの具体的な用例数は、次頁の表1の通りである[9]。

表1から明らかなように、［これ＋命令形］という構文では、命令形動詞の種類によ

表1

	これ＋見よ		これ＋その他命令形	
	これφ	これを	これφ	これを
天草版平家物語	2	0	0	2
天草版伊曾保物語	0	0	0	1
サントスの御作業	0	0	0	1
コンテムツスムンヂ	0	1	0	7
スピリツアル修行	1	1	0	5
ヒイデスの導師	0	0	0	2
説経節	8	1	0	10
幸若舞	2	0	0	2
大蔵流虎明本	8	0	1	1
大蔵流虎清本	1	0	0	0
和泉流狂言六義	5	0	0	4
鷺流忠政本	0	0	0	7
計	27	3	1	42

ってヲ格名詞句「これ」の出現形態（これを／これφ）が異なる。拙稿（2010）では以上の事実を明らかにした上で、指示詞「これ」の感動詞化について次のような仮説を立てた。すなわち、中世末期において慣用化していた［これφ＋見よ］という構文パタンが、表現全体としては全く同一の形態をもつ「コレ、見よ」（感動詞＋命令文）という二文へと再分析されたとの仮説である。

⑺ ［これφ［見よ］］＞［コレ］［見よ］

ここで改めて論点を整理しておこう。感動詞「コレコレ」の成立に対する従来の見方は、上述のような指示詞「これ」の感動詞化を受けて、その感動詞「コレ」の反復タイプとして「コレコレ」が確立したとするものである。しかし、［これこれφ＋命令形］の「これこれφ」が指示詞句「これφ」の反復であるならば、その表現が感動詞化することで感動詞「コレコレ」が生じるという可能性が浮上することとなり、従来の見解の蓋然性は必ずしも保証されなくなると思われる。この点については4節で再び触れる。

さて、上述の点を抑えた上で［これこれφ＋命令形］の検討に移ろう。同じように命令形動詞に注目しながら資料別に用例を確認していく。なお、調査資料は表1と同じであるが、キリシタン資料には用例が見られなかった。

説経節から見てみると［これこれφ＋見よ］が4例見られるのに対し、［これこれφ＋その他命令形］は1例にとどまった。⑻、⑼にそれぞれの全例を示す。なお、例

文中の［　　］部分は「これこれ」の指示対象である。

(8) a．［ころものかたそて］是にあり。是々御らん候へや　（説経節・山庄太輔）

b．是〳〵御らん候へ、［此こがね］を、おもての門くわいにてひろい申て候

（説経節・まつら長じや）

c．おろかの仰、是〳〵御らん候へと、［くたんのしきし］を取出せは、中将取上見給に、うたかいもなき、あやめの前の御手跡也

（説経節・尾州成海笠寺観音之本地）

d．若みやの［御かたみ］さし上れは、御母聖むていの御枕に近付て、是〳〵ゑいらん候へ、若みやのかたみを持、友成かへり候と

（説経節・大福神弁財天御本地）

(9) このはに［水］をふくませて。御枕によりそひて。これ〳〵聞召れよと

（説経節・ほうぞうびく）

ここから、［これこれϕ＋命令形］にも［これϕ＋命令形］と同様の傾向が存することが窺える。これは幸若舞でも同様で、やはり［これこれϕ＋見よ］の用例がまとまって見られる。

(10) a．もし牛若殿ゆかりにても御座候はゝ。御名乗候へ。［数の形見］をとりいたし。これ〳〵御覧候へとて。牛若殿に参らせ上る　（幸若舞・山中常盤）

b．これ〳〵御覧さふらへとて。［たまのやうなる若君］を。いたきあけて見する

（幸若舞・しつか）

c．そのために［具足］を二両おとしたつるこれ〳〵御覧さふらへや

（幸若舞・高たち）

d．信田殿の御命には。夫のちはらかかはり申て。かす〳〵の文共を。とゝめをかせ玉へとも。まいらせあくる事もなし是々御覧侍へとて。［ありし昔の文共］を。あねこの御手へまいらせあくる　（幸若舞・信太）

e．やかてとのこをまふけ。是〳〵御覧さふらへ［三人の若］をまふけて侍ふ

（幸若舞・伏見常盤）

このほか、幸若舞には「これこれ＋拝み申せ」の例が3例見られるが、この「拝む」は「あがめ敬う、拝礼する」（邦訳日葡辞書、p. 703）の意ではなく、「見る」の謙譲語としての用法と捉えることができそうである。

(11) a．かくて信田殿。御墓を下向有ける處に。あみかさふか〳〵とひつこふたる男

の。あやしきさまにまいりあふ。誰成らんと御覧すれは。是は別て年久しき。浮嶋太夫なりけり。（略）くして河内へかへり。五人の子共をちかつけ。是〳〵拝み申せ。此程汝等かこひたてまつりしに。諸点のめくみの有により。不慮にまいりあふ叟は。いちかんの亀のたまさかに浮木にあへることし。

（幸若舞・信太）

b．長田御教書を頂き。夜半に人をまはし。五人の子共を近付。是〳〵拝み申せ。論旨のむね至極の道理爰にあり。（幸若舞・鎌田）

c．和田秩父北條殿。君へ申させ給ひ。助け給ふべき御教書。これ〳〵拝み申せとて時宗か膝にをく（幸若舞・十番斬）

よって、幸若舞における［これこれϕ＋命令形］の全8例は、すべて［これこれϕ＋見よ］の用例ということになる[10]。

狂言台本も先に挙げた説経節や幸若舞と軌を一にしており、［これこれϕ＋命令形］のすべてが［これこれϕ＋見よ］の例である。しかしここで、狂言台本における当タイプの出現環境の偏りに注意する必要がある。『虎明本』の例から見ていこう。

⑿ a．千石のこめほね、万石のこめほね、めぢかにもちて参りたり、是〳〵御らん候へ、げにもさあり、やようがりもさうよなふ（虎明本狂言・目近籠骨）

b．千石の米ほね、万石の米ほね、めじかにもちて参りたり、是〳〵御らん候へ、げにもさありやようがりもさうよなふ（虎明本狂言・目近籠骨）

⑿の両例は囃子の一部であり、表記に若干の差があることを除けば完全に同じ詞章である。『狂言六義』でも同様に、［これこれϕ＋見よ］が出現するのは、4例すべて囃子部分においてである。一部を示す[11]。

⒀ a．三本の柱を、三人の者共が二本ヅヽもつたり、これ〳〵御覧候へ、実もさあり、やよがりもさふよの〳〵（狂言六義・三本の柱、抜書）

b．千石の米骨、万石の米ぼね を目ぢかに持てまいりた、これ〳〵御覧候へ、実にもさあり、やようがりもさふよの〳〵（狂言六義・目近米骨、抜書）

このように、狂言台本における［これこれϕ＋命令形］（すべて［これこれϕ＋見よ］）の出現は囃子部分に限られ、会話文には用いられていない。台本固定期以前の流動的な狂言詞章の中にあって、謡や囃子など節付の部分が早い段階から正確な継承がなされることは夙に指摘される通りである[12]。そのため、このような分布は一見すると［これこれϕ＋命令形］が当時の話しことばには既に用いられなくなっていたことを示すように

も見える。しかし、3.1に後述するように近世期の資料にも［これこれφ＋命令形］の例は確認されるため、本稿では、上記のような偏りは『虎明本』以降の狂言台本が基本的に［これφ＋命令形］を用いる方針をとり[13]、囃子部分に関しては元となるテクストを踏襲するという選択方針の差によって形成されたものに過ぎないと考える。

狂言台本を含めた具体的な数値をまとめると表2のようになる[14]。［これこれφ＋命令形］の場合も［これφ＋命令形］と同様に、共起する命令形動詞が「見よ」に偏っていることが明らかである。

表2

	これこれφ＋見よ	これこれφ＋その他
説経節	8	1
幸若舞	4	0
大蔵流虎明本	2	0
和泉流天理本	4	0
計	18	1

命令形動詞の語彙的な偏りという観点から見ると、［これφ＋命令形］と［これこれφ＋命令形］は並行的である。このような並行性が見られるのは、［これこれφ＋命令形］の「これこれφ」が［これφ＋命令形］の［これφ］を重ねたものであるからと考えるのが自然である。よって［これこれφ＋命令形］の「これこれ」は指示詞の用法と見るのが蓋然的である。

ここで、指示詞「それ」「あれ」にも同様の用法が見られるという事実を併せて指摘しておく。

(14) a．それ、みなかやせト云　シテ〈一度、とつた物を、返ス物カト云
（狂言六義、やせまつ）

b．頼朝御諚には秩父殿は見しりたまひてやおはすらんそれへ見たまへ
（幸若舞・含状）

(15) a．あれ見給へ、さいせんの女と、みつつういたせし者にて有
（説経節・尾州成海笠寺観音之本地）

b．あれへ御らん候へや、あれにむねかとの二けんならふたるは。五人のきんだちの御家かし
（説経節・山庄太輔）

［指示詞句の反復＋命令形］という用法が指示詞全体に可能であったならば、上述の見方は、より蓋然性を増すと言えよう。

2.2 単独で現れる「これこれ」

次に、「これこれ」が単独で現れるタイプを見る。中世末期において、「これこれ」が単独で用いられる場面では、必ず話し手領域に指示対象が存在している。用例の多くが集中する狂言台本から見ていこう。⑯に『虎明本』、⑰に『虎清本』の例を示す。

⑯ a.〔売手〕ふるがらかさがある、是をうりつけう、なふ〳〵、最前の人、これ〳〵〔太郎冠者〕是がすゑひろがりでござるか（虎明本狂言・すゑひろがり）

b.〔売手〕すゑひろがりにいたひて見せう、（ひろげて）これ〳〵〔太郎冠者〕実も誠にしたゝかにひろがつて御ざる（虎明本狂言・すゑひろがり）

c.〔売手〕今なりともじゆもんとなへてうては、何なりともほしひ物をうち出すがきどくじや〔太郎冠者〕さらは何成共打出ひて見せさせられい〔売手〕こそ御めにかけう、これ〳〵（虎明本狂言・財のつち）

d.〔冠者〕先こめぼねから御めにかけう、是々〔果報者〕都へのぼつて、北野か、祇園かへまいつたと見えて、おくまをもつてきたか、先こめぼねを見せい（虎明本狂言・目近籠骨）

e.〔売手〕最前の人おじやるか、これ〳〵〔冠者〕是がそで御ざるか〔売手〕中々、はり太こといふ物じや（虎明本狂言・はりだこ）

f.〔売手〕最前の人おじやるか、これ〳〵〔冠者〕是がこめほねで御ざるか（虎明本狂言・目近籠骨）

⑰ これ〳〵といひて、つなかれたをおしゆる（虎清本狂言・猿座頭）

(16a)は「ふるがらかさ（傘）」を「末広がり」と偽って売りつけようとする場面であり、話し手がその傘を差し出しているところである。聞き手が「是がすゑひろがりでござるか」と確認していることからも、この「これこれ」は傘を指示していると見てよかろう。

これは、［これこれϕ＋見よ］の述部が省略されたものとも[15]、「これ。」という名詞一語文の連続とも見ることができそうであるが[16]、そのいずれであるかについては確定的なことは言えない。本稿で重視したいのは、「これこれ」という形態のみで話し手領域の事物を指示し、聞き手の視線を向けることが可能であるという現象面である。以下、このタイプを［これこれϕ］の形で示す。

他の用例に目を向けよう。(16b)は、閉じていた傘を開いた状態にして再度聞き手に見せる場面である。やはり話し手が手にする傘を［これこれϕ］によって指示していると解釈できる。(16c)(16d)でも「御めにかけう」とあるように、実際に「財のつち」や「こめぼね」を聞き手に見せている。この場合も［これこれϕ］の指示対象となる具体的な事物が現場に存在する。さらに、(16e)(16f)では、聞き手による「是が〜か」との

確認が見られる。聞き手がいう「これ」とは、［これこれφ］と言いながら差し出された「はりだこ」や「こめぼね」である。『虎清本』に見られた⒄では、話し手が「つなかれ」ている状態そのものを「これこれ」と指示している。

さらに、説経節に存する2例にも同じことが言える。

⒅ a．是へ 我有様 をよつくみて、げこんげち成僧共に、よくまなばせとの給ひ
（説経節・越前国永平寺開山記）

b．やかて御前に参りつゝ。殿はらにたいめんし。是々 御返事 とて奉る
（説経節・をくりの判官）

(18a)は「我有様」を［これこれφ］と指示しながら、聞き手にその状態を見せようとする例で、⒄の類例である。(18b)は「御返事」（書簡）を取り出して、それを［これこれφ］で指示している。

こうした分析は文脈解釈によらざるを得ないが、当期における［これこれφ］の全てが現場指示の機能を果たしているという事実を積極的に捉えれば、やはり当タイプは指示詞「これ」の用法の枠を脱しないものと考えるべきである。話し手領域に指示対象が存在するという場面条件に限って成立する［これこれφ］と、次の⒆のような表現が可能な感動詞「コレコレ」とは明らかに異なっている。

⒆ a．是へ。 あの三つまいる真中 をいさせられい （狂言記外五十番・八幡聟）

b．これへ その長太刀 かやせ （狂言記外五十番・女山立）

⒆で話し手が指示しているのは、ソ・ア系指示詞で示される「あの三つまいる真中」「その長刀」であり、［これこれφ］の指示対象は見られない。こうした例と比較してみても、やはり［これこれφ］は指示詞「これ」の用法の範囲に収まると言えよう。

また、「これ」単独で一語文となり、［これこれφ］と同じ機能を果たすタイプ（以下、［これφ］）が存することも上述の解釈を保証する。［これφ］は中世末期には見当たらないが、近世初期資料に目を向けると存在が確認できる[17]。

⒇ a．是を染てたべとて 手拭 を出す （醒睡笑・静嘉堂文庫本）

b．これ てぬくひ を指出す （醒睡笑・内閣文庫本）

(20a)(20b)は、『醒睡笑』の異本間における同個所の対応である。この異文は、(20a)に見られる「是を染てたべ」のような内容を、［これφ］のみで言い表すことが可能であったことを示唆している。この［これφ］は［これこれφ］と全く同様の一語文的表現

と言えよう。ただし［これφ］の用例数は少なく、一語文的表現としては［これこれφ］が選択されることが多かったようである。

3．近世初期の様相

2節では、中世末期における「これこれ」がいずれも指示詞の用法であったことを確認した。言い換えれば、この段階では感動詞「コレコレ」は未だ出現していない。こうした状況は、寛文年間（〜1673）頃まで継続されたようである。この期間に成立した噺本と『狂言記』（1660）を対象として確認していく。

前提として、当期においても［これφ＋命令形］が中世末期と同じく［これφ＋見よ］に集中することを指摘しておく。全10例のうち一部を(21)に示す。一方、［これφ＋その他命令形］の例は(22)の2例しか見られない[18]。

(21) a．カヤウナル文字者ノアルニ是御覧候へ　（噺本・寒川入道筆記／1622年）
b．是見よや人々目出たるあなのミ残りしをバ、めでたしといふなるぞ　（噺本・一休はなし／1668年）
c．是御ろんじやれませい　（狂言記・抜殻／1660年）

(22) a．のふ〳〵。さあ〳〵。これ［を］きさせませ　（狂言記・相合袴／1660年）
b．是［を］もつてゆけくわじや　（狂言記・武悪／1660年）

中世末期の［これこれφ＋命令形］はこれに並行する傾向を見せたが、この時期はどうであろうか。(23)に［これこれφ＋見よ］、(24)に［これこれφ＋その他］の例を示す。

(23) a．是〳〵御らん候へ、当世ハ［いろ〳〵の事］がはやる　（噺本・寒川入道筆記／1622年）
b．［さけとさかつき］を、まくらもとにをき、これ〳〵、目をひらきて、御らん候へ　（噺本・昨日は今日の物語／1614–24年頃）
c．ひがし河原へ御出有て、これ〳〵見たまへとて、［両方の御手］をひろげ給　（噺本・一休はなし／1668年）

(24) a．是〳〵よく〳〵、うけたまへと、［ゑかうほつくハんの、かね］うちならす　（噺本・昨日は今日の物語／1614–24年頃）
b．［まへ］をたむけよとの給ひしものをとて、まへをひらいて、これ〳〵よくうけ給へと有を　（噺本・わらいくさ／1656年）

用例数全体の少なさも考慮しなければならないところではあるが、全5例中3例が［こ

れこれφ＋見よ］であり、当期の［これこれφ＋命令形］のあり方は中世末期の傾向をそのまま踏襲していると言えそうである。また、［これこれφ＋その他］の2例も述部が他動詞「うく（受）」であるから、これらの「これこれφ」が［これφ＋命令形］における目的語指示詞句「これφ」を重ねたものであるとの解釈は十分に成り立つだろう。それぞれの用例数を表3にまとめる。

表3

	噺本（～寛文）	狂言記
これφ＋見よ	8	2
これこれφ＋見よ	3	0
これφ＋その他	0	1
これこれφ＋その他	2	0

次に［これこれφ］であるが、こちらも話し手領域に指示対象が存在する例ばかりであり、指示詞「これ」の用法と見て問題ない[19]。用例の一部を示す。

(25) a．是非なく筆をとり、くるへとまハしておつとり、さつとかいてこれへとてふせりける。望ミ足ぬと其画を取てかへり　（一休はなし／1668年）
b．かたしけなくも。法念上人よりも。つたわりの。じゆず。ちつといたゝきやれ。是へ　（狂言記・宗論／1660年）
c．是へ。ぢがみよくとは此紙の事でおりやる（狂言記・末広がり／1660年）

このように寛文年間頃までは、まだ中世末期の状態が継続していることがわかる。2.2に挙げたような、現場に「これ」の指示対象が明らかに存在しないような例が出現するのは、それ以降の文献からである。

(26) a．これへ その長太刀 かやせ　（狂言記外五十番・女山立／1700年）
b．是へ。 あの三つまいる真中 をいさせられい　（狂言記外五十番・八幡聟／1700年）

(27) a．是々御坊。 御身が衣 のやぶれまはつて見ぐるしさよ（略）あたらしいをかふて それ を是にぬいでいきや　（近松・堀川波鼓／1707年）
b．是々、侍衆、 先若殿の御機嫌 をうかゞひ給へ　（歌舞伎・けいせい浅間嶽／1698年）

(26)は2.2で掲げた(19)の再掲で、話し手が指示するのは「その長刀」「あの三つまいる真中」というソ・アの領域に属する事物である。(27a)で話し手が言及するのは聞き手の衣服

についてであり、「これこれ」によって指示されるものは現場に存在していない。(27b)も同様で「これこれ」を指示詞「これ」の反復と解釈することはできない。これらの例は、中世末期から寛文までの「これこれ」とは明確な隔絶がある。ここに至ってはじめて感動詞「コレコレ」の確例が出現したと言える[20]。

以下では、2節及び3節において見てきたことを踏まえて、感動詞「コレコレ」の成立プロセスを検討してみたい。

4．感動詞コレコレの成立

4.1 従来の見解と問題点

中世以降、文献上に多く姿を表わす「ナウ（ノウ）」「ヤイ」などの呼びかけ感動詞は、「コレ：コレコレ」と同じようにそれぞれの反復タイプとバリエーションの関係にある。

(28) a．司馬夜引――ヲキサシメ、ナウオキサシメトテソ（漢書抄）
　　b．ナフ〳〵旅人、其路ハ臨川ノ路ニテハナキゾトヨ（中華若木詩抄）
(29) a．やい、おのれきけ（狂言六義・首引）
　　b．やい〳〵汝はたれがものなれは、理不尽な事をいふぞ（虎明本・雁盗人）

「ナウ（ノウ）」「ヤイ」のような非語彙的感動詞の場合、反復タイプXXは感動詞Xの存在を前提として派生的に生じるものであるが、従来、「コレコレ」の成立過程についても、これらのケースへの無批判な類推（「コレ」からの派生）がなされてきたものと思われる。しかしここまでに述べてきたように、中世末期における［これこれφ＋見よ］及び［これこれφ］という表現が指示詞「これ」の用法として解釈可能であるならば、感動詞「コレ」の反復としてではなく、指示詞句の反復「これこれ」から感動詞「コレコレ」が生み出された可能性を提示しうることとなる。そこで、このような観点から「コレコレ」の成立プロセスを考察する。

4.2 「コレコレ」成立のプロセス

「コレコレ」成立についての考察を行う上で、拙稿（2010）で述べた指示詞「これ」の感動詞化について再度確認しておくこととする。中世末期から近世初期にかけての［これφ＋命令形］の大半を［これφ＋見よ］が占めることは、既に2.1で述べた通りである。また、拙稿では［これφ＋見よ］に再掲する(7)′のような再分析が生じた結果、感動詞「コレ」が生じたものとの仮説を立てた。

⑺′［これφ［見よ］］＞［コレ］［見よ］

⑺の仮説は、次の二点から蓋然性を主張しうる。まず、指示詞「これ」の感動詞化を統語的側面から見れば、本来述部に要求される項として構文に組み込まれる名詞「これ」が、構文構造の外側に位置する要素へと変化する現象である。従来、感動詞「コレ」が指示詞「これ」に由来することと、両者の意味的連続性への指摘はあったが、ここでいう統語的側面については看過されてきた。上述の仮説のように指示詞句「これφ」を含む構文構造そのもののあり方に変化が生じたと見れば、この点が説明付けられる。

機能の面から見ると、［これφ＋見よ］は話し手領域に存在する事物を指示し、それを聞き手に見せることを意図する発話であるから、必然的に聞き手の注意（視線）を話し手側に向ける機能を包含する。従って形態面のみならず、機能面においても当構文と感動詞「コレ」との連続性が窺われるのである。

改めて「これこれ」に目を移そう。ここでは「これこれ」の2類型のうち、［これこれφ＋見よ］の「これこれφ」が、「コレ」成立の基盤となった［これφ＋見よ］の「これφ」を重ねたものであるという点に着目したい。両構文の構造および意味内容は同じであるが、これは言葉を換えれば、［これφ＋見よ］が内包していた再分析の条件が［これこれφ＋見よ］にも同様に備わっていたことを意味する。

だとすれば、感動詞「コレコレ」は感動詞「コレ」の反復により生じたのではなく、そもそも「これこれ」という形態をもつ指示表現が、《指示詞「これ」＞感動詞「コレ」》と同一の変化原理に従って感動詞化したものと考えられるのではないだろうか。二つの変化は、以下のように並行する現象として捉えることができる。

⑶⓪　a．［これφ［見よ］］　　＞［コレ］［見よ］
　　b．［これこれφ［見よ］］＞［コレコレ］［見よ］

2.2で述べた［これφ］及び［これこれφ］のタイプが［これφ／これこれφ＋見よ］と同時期に併存していたことも、当該の変化の背景に働いた要因の一つに数えられよう。「これφ／これこれφ」という形態がそれ自体で（一語）文として成り立ちうるという事実が、［これφ＋見よ］の［これφ］部、［これこれφ＋見よ］の「これこれφ」部を感動詞（＝一語文）として分析し直すことを推進したものと考えられる[21)]。

また、4.2に示した、感動詞Xが反復タイプXXとペアを成すという共時的事実も当変化に大きく関わるものであろう。［これφ＋見よ］と［これこれφ＋見よ］における指示詞句「これφ／これこれφ」は、感動詞が形成するペアと形態的に対応している。従って、「これφ／これこれφ」のいずれか一方が先駆けて感動詞へと再分析された場合[22)]、もう一方がそのペアとして再分析される確率はきわめて高いものとなる。たとえば仮に感動

詞「コレ」の成立が先行したとするならば、その時点での感動詞体系は以下のようになる。

感動詞	反復タイプ
ヤイ	ヤイヤイ
ナウ	ナウナウ
⋮	⋮
コレ	

このような状況で、［これこれφ＋見よ］の再分析が受け入れられるのはごく自然であるように思われる。無論、「コレコレ」が先に感動詞化したと仮定しても同じことが言える。このような感動詞体系のあり方が変化の背景に存していたであろうことも指摘しておく。

5．まとめ

本稿では、従来感動詞と目されてきた中世末期の［これこれφ＋見よ］と［これこれφ］という二つの表現類型を考察対象とし、それらがいずれも指示詞「これ」の一用法であったことを明らかにした。また、感動詞［コレコレ］の成立は、先に見た［これこれφ＋見よ］のタイプが再分析された結果によるものであるとの主張を行った。それにより、従来感動詞「コレ」の反復タイプとして派生的に生じたと考えられてきた「コレコレ」の成立事情について、新たな可能性を提示した。

本稿で行ったのは、現象面の事実認定とそこから成り立ちうる仮説の提示に過ぎない。従って、［これこれφ＋見よ］及び［これφ＋見よ］がヲ非表示で慣用化した理由や、［これφ］よりも［これこれφ］が一語文的表現として優勢であった要因など、残された問題は少なくない。

また、同じ意味・構文構造を有し、同じ変化を被った［これφ＋見よ］と［これこれφ＋見よ］のうち、どちらが先に再分析されたかという点までは明らかにしえなかった。感動詞「コレ／コレコレ」はどちらが先に成立したか、その要因は何か、また先駆けて生じた変化がもう一方の変化に及ぼした影響はいかなるものか[23)]、今後これらの点を中心に変化の要因や道筋をより具体的に説明づける必要があるだろう。

注

1）以下、本稿で「感動詞」と言う場合、「呼びかけ感動詞」を指す。

2）これらが「コレコレ」で一語であるか「コレ、コレ」という繰り返しに過ぎないかは判断しがたい。よって本稿では「畳語（形）」という言い方は用いず「反復タイプ」とし、あくまで形態的に反復するとの見方にとどめる。なお、本稿の「反復タイプ」とは、「感動詞の反復タイプ」を指す

ものであり、形式が繰り返される表現全体を指すものではない。

3）本稿でカタカナ表記する「コレコレ」は感動詞としてのそれを指す。［korekore］という形態をもつ表現全体を指す場合は「これこれ」とひらがな表記する。

4）田窪（2005）による。

5）森田（1973）、織田（1994）、拙稿（2010）など。

6）『時代別国語大辞典・室町編』など。

7）助詞を後接して現れる「聞き手に述べたてるに及ばない個個の事実について、一一の言及を省略してまとめて述べる語」(『時代別国語大辞典・室町編』) のこと。本稿ではこの複合名詞「これこれ」はひとまず措くこととしたい。

8）この点で、助詞を後接する「これこれ」とは異なる。助詞後接の「これこれ」が一語化した複合名詞であるのに対し、［これこれφ＋命令形］「これこれφ」は「これφ、これφ」という句の連続である。

9）『説経節』以下の資料は書写時期は近世以降のものであるが、中世末期の言語を反映するものとして扱う。

10）『日葡辞書』にはそのような用法の記述は見られないが、『日本国語大辞典』が中世末期の「拝む」に「見る」の謙譲語としての用法を認めていることを指摘しておく。なお、これらを「あがめ敬う、拝礼する」の「拝む」とみなした場合にも、当資料における［これこれφ＋見よ］と［これこれφ＋その他命令形］の用例数は5例：3例となり、［これこれφ＋見よ］の比率が高いことに変わりはない。従って［これこれφ＋見よ］の優勢が揺らぐことはなく、以降の議論への直接的な影響はないと言ってよい。

11）(12b) の例は、同流『和泉家古本』(1653〜93) にも同詞章で継承されている。

・これ〳〵御らん候へ、げにもさありやよがりもさうよの〳〵（和泉家古本・目近米骨、抜書）

12）注11) 参照。また、(11) の詞章も、18世紀後半書写の大蔵流『虎寛本』(1772) 所収の同曲『目近』でもそのままの形で残存している。

・千石の米ぼね、萬石のこめぼね、目近に持て参りた。是〳〵御覧候へ。実もさあり、やようかりもさうよの〳〵（虎寛本狂言・目近）

13）［これφ＋命令形］（大半が［これφ＋見よ］）は会話文に用いられ、［これこれφ＋命令形］のような出現環境の偏りは見られない。

14）調査対象は表1と同じだが、用例が見られた資料のみ示す。

15）以下のように、ヲ表示の「これを」でも同様の表現が成り立つことにも注意が必要である。

・これを〳〵とて、御文をまいらせ侍れは（御伽草紙・唐崎草子）

16）佐藤（2009）が「さあ、これだ。これさえあれば、どんな関署でも通られる」の「これだ」を、「きき手に注目点を指定」するものとするように、現代語においても似たようなケースを挙げることができそうである。

17）4節に詳述するように、『醒睡笑』の段階では、中世末期の様相が継続されている。

18）本節に限り、各文献の成立時期を付記する。

19）次のように「これ」が場所（ここ）を指すものもあるが、直示用法には変わりない。

・これ〳〵、是に腰をかけて。いさしませ（狂言記・内沙汰）

・ふん。これ〳〵いなか人。これへよらつしやれい（狂言記・末広がり）

20）ただしこの段階では現場指示的用法の「これこれ」も多く見られ、感動詞の確例と呼べるものはまだ少ない。

21）現場への依存を前提として成り立つ［これこれφ］という表現が、指示機能を失いながら漸次的に感動詞へと変容していくという過程は考え難い。やはり感動詞「コレコレ」は、構文構造の再分析によって「これこれ」という形態が元の構文構造から切り離された結果生じたと見るべきであろ

う。よって本稿では、［これこれϕ］が感動詞「コレコレ」の直接の前身であるとはみなさず、変化の一要因と見る。

22）本稿では、［これϕ＋見よ］と［これこれϕ＋見よ］が同じ変化の条件を整えていたことを指摘するにとどめ、その変化の先後関係までは問題としない。

23）4.2に、及ぼしうる影響について見通しを述べた。

参考文献

小田勝（2006）『古代語構文の研究』おうふう
織田稔（1994）『直示と記述同定――英語固有名の研究』風間書房
佐藤里美（2009）「一語文的な名詞文の意味・機能」『日本東洋文化論集』15
田窪行則（2005）「感動詞の言語学的位置づけ」『言語』34–11
深津周太（2010）「近世初期における指示詞「これ」の感動詞化」『日本語の研究』6–2
森田良行（1973）「感動詞の変遷」『品詞別日本文法講座 6　接続詞・感動詞』明治書院

調査資料一覧

【キリシタン資料】
天草版平家物語：『天草版平家物語 大英図書館本影印』福島邦道解題、勉誠社、1994
天草版伊曽保物語：『天草版イソポ物語』福島邦道解説、勉誠社、1976
サントスの御作業：『サントスの御作業』H. チースリク・福島邦道・三橋健解説、勉誠社、1976
ヒイデスの導師：『キリシタン版ヒイデスの導師』鈴木博編、清文堂、1985
スピリツアル修行：『スピリツアル修行の研究 影印・翻字篇』林田明編、風間書房、1975
『邦訳 日葡辞書』土井忠生・森田武・長南実編、岩波書店、1980
【抄物】
漢書抄：『続抄物資料集成 第 4 巻 漢書抄』大塚光信編、清文堂出版、1980
詩学大成抄：『新抄物資料集成第 1 巻』大塚光信編、清文堂出版、2000
【狂言台本】
虎明本（大蔵流）：『大蔵虎明本狂言集の研究 本文篇 上・中・下』北原保雄・池田廣司著、表現社、1972–82
虎清本（大蔵流）：『近代語研究第三集 虎清本』近代語学会編
虎寛本（大蔵流）：『大蔵虎寛本能狂言 上・中・下』笹野堅編、岩波文庫、1942–45
狂言六義（和泉流）：『狂言六義全注』北原保雄・小林賢次編、勉誠社、1991
狂言古本（和泉流）：『日本庶民文化資料集成 第 4 巻 狂言』藝能史研究會編、三一書房、1975
狂言記：『狂言記の研究』上・下、北原保雄・大倉浩著、勉誠社、1983・85
狂言記外五十番：『狂言記外五十番の研究』北原保雄・大倉浩著、勉誠社、1997
【幸若舞】
『幸若舞曲集本文』笹野堅編、第一書房、1938
【説経節】
『説経節正本集 一、二』横山重他校訂、大岡山書店、1936
【噺本】
醒睡笑：『醒睡笑 静嘉堂文庫蔵 本文編 笠間索引叢刊117』岩淵匡編、笠間書院、1997
昨日は今日の物語：『きのふはけふの物語 研究及び総索引 笠間索引叢刊 9 』北原保雄編、笠間書院、1973
その他：『噺本大系』岡雅彦・武藤禎夫編、東京堂出版、1975–1979

※その他は全て『日本古典文学大系』及び『新日本古典文学大系』を参照した。